

LIVE: THE RANKERS 1994.1.30 新宿アンティノック



photo by k.k.

75号(1993.12.20発行)で、前回のツアーでの1993年10月7日のライブについて、「至高体験という面からいったら、もしかしたらこの日(1993.10.7)のTHE RANKERSは、いままでに私がライブハウスできた何百というライブのなかでいちばんすごいライブだったといえるかもしれない」と書いた。それから約4ヶ月後、また博多からツアーで東京に来た。とっても楽しみに待ってた。あの時と同じくらいすごいいいなって思った。あの時よりすごいライブなんて想像することができなかったから。

ステージにメンバーが出てきたら、な、な、な、なんとギターが2人になる!!! えーっ!!! こういう展開ってありなの??? なんて??? どおして???

で、はじまったとたん、わかった。ロックンロールの怪物みたいなTHE RANKERSにもう一匹怪物が入ったんだってことが。リード・ギターとリズム・ギターなんていう区別なんかまったくなくて、もう2人も怪物リード・ギター!!! そして、ギターが×2になった分、ヴォーカルもベースもドラムもヴォリューム・アップ、パワー・アップ。

2曲やったあとヴォーカルの人が「あ、どうも。博多から来ましたTHE RANKERSです」というのをきいては拍手、「とりあえず5人になったけん」というのをきいては拍手、といったぐあいに、こっちも全開バリバリになっちゃって、手をふりまわして、怪物みたいに「ギャー!」と叫びたくなるほどだった。伝染るんですね、あれ。伝染性怪物症候群。この日のあとの2月2日のシェルターのライブは、屋根裏IIの狂乱と重なって、行くのをあきらめたんだけど、当日になって、はじまる時間がすこしずれていることがわかって、シェルターで時間まで見てから屋根裏IIに行くことにした。この日は1月30日よりひときわ怪獣度がアップしていた。3曲だけだったけど、満足した。白熊みたいなジャケットの新しい怪物ギターの人の「こんばんわあーっ、ははは、こんばんわ、博多から来ましたザ・ランカーズです。はじめまして」という声をあとにしながらかシェルターを出た。デビングしてもらったテープをきいてみるとこのしゃべりのつづきがすごくおもしろい。「えーとね、注意事項その1、ライブのときケツを向けないように。以上。はははは」、「なんか気のきいたことを言ってみんなのハートをキュッとつかみたいねん。へへへっ」、「はじめてここに来たけどわかりづらいね、下北沢は、っていつても東京はどこもぜんぶわかりづらいけど。田舎者やけん山の手線に乗ったらなんや緊張した。きつぷの買い方からんで。バチンってやられんでよかった。あ、アンパがこわれたみたい、業務連絡その2」「DMを書きたい。アンケート用意しようかと思ったけどおすれた。『このバンドのどんなところが好きですか』とか、カッコわるいね。『好きな曲はなんですか』って、ひひひ。DMを書いてほしい人だけ住所と名前をメンバーに教えてちょうだい。そいつだけだ。それ以外はしらんな」、観客の笑い声もしっかりはいつてる。



photo by k.k.

機材のトラブルで中断したあとも、すこしもテンションさがらず。テープをきくだけでもそれはわかる。中断のすぐあとにやったスローなバラードは、はじめてきく曲で、ああ、こういう感じのもやるんだ、ってテープをききながらうれしくなった。ギターが2人になったのもいいし、いままでもしなかったところが感じられたのもいいし、新しいギターの人のしゃべりが楽しいのもいい。つぎにツアーで東京に来るのは5月とのこと。まちどおしい。[博多では有名。だけど東京では無名]なんていつても。博多でも見てみたいな。

← THE RANKERSの新しい怪物

LIVE: 眼球駆楽舞 1994.3.3 高円寺屋根裏II

2月18日の浦和ナルシスのライブは、音もヴォーカルもよく聞こえなかったので、ステージで為されていることが、真摯なものであることは見えているのだが、聴いている私のところにときにくくなっていた。これは多分ライブハウスのせいで、この日の屋根裏IIはきくとちゃんと聞こえるだろうと楽しみにしていたのだが、それは正解だった。

眼球駆楽舞は狂乱のベースの英郎がヴォーカル、狂乱のギターの小嶋茂がベースで、あとギターとドラム、2人も女性、という編成。

「SOS」のインタビューでもそう思ったけれど、英郎の言葉(話す言葉も、詩の言葉も)の組立て方は、言葉をきちんと積んでいくという感じが強い。その結果、詩の躍進^{ジャンプ}の方向も着地^{フィニッシュ}する世界も狂乱とはちがうが、やっぱり独特で説得力がある。「おまえを眠らす」という歌がいちばん好き。

LIVE: 狂乱 1994.3.17 下北沢シェルター

眼球駆楽舞のドラムの人をサポートにはいつてのライブ。

この日の狂乱はごちこちなかった。シェルターが狭すぎるという感じもした。歌が前回、前々回ほど突き出されないうまま、演奏だけが先走っていつているうちにライブがおわってしまった。

この日の狂乱のライブで、ヴォーカルのジュンが口から出た歌詞を掴まえそこねているように思えたことで、歌が突き出されて聴く者に迫ってくるということとは、歌われた歌詞がどこかへ浮遊していつたり消えていつたりせず、歌い手がそこに掴まえたままにいてるからなのではないかということを考えて。ぐうっと、掴まえたまま離さないでいると、それが緊迫感として聴く者に伝わってくるのではないか。

CD: 狂乱 「狂乱」 MEDIA CAPSULE

「ミッドナイト・プレス15号で、狂乱について(「狂乱は)聴く者を暴力的に生まれたばかりの人間の、無防備で無垢な状態に追いやる」と書いたが、CDを聴いてもそのとおりのことが起こった。CDをずうっと聴いていくと、どんどん自分の中に入っていくって、最後の曲「an archos(アナキズム)」のおわりの部分の「オマエ自身の呪縛を」というところで、その無防備で無垢な状態になった。曲がおわり、静寂がおとずれるとともに目に涙があふれでてきた…。CDはそこでおわらず、そのあとに1曲目の「あるがままに」の音の感じがすこしちがうものが入っていて、それが聞こえてきたときには、もう涙が流れて流れて…。昇華。



an archos (アナキズム)

「技術的な進歩で楽器を完全に演奏しうるだけでは、音楽家は音楽の靈魂——音楽の魂を十分に生かすことにならない。音楽家が魂をく通して、く通して演奏するようになる。曲がく通してそれが叫ばれるのだ。」

「スポーツを練習していると、——にか大層員に熱中していつている時など彼の心を通して競技自体がひとりで行われる日があるだろう。同じように音楽家は音楽の技術と心を通して音楽が流れるのであろう。」

WORDS: コリン・ウィルソン (「至高体験」より)

LIVE: 灰野敬二 1994.3.1 新宿ロフト

灰野敬二は、ステージも客席も暗くしたまま(動きがわかる程度の暗さ)で、一人だけで、ギターをふりまわすように弾きながらステージの上を動き回り、ときどきマイクにむかって、ときどきぎれぎれの歌とか、独り言とか(何を言っているのかは全く聞きとれない)、そういうものをやり、ときどきアンパやエフェクターを操作する。それが50分間つづいた。

ゲームセンターに座席にすわって前の画面に映し出される道路を見ながら車の運転をするというゲームがあるが、灰野敬二のステージは、そのゲームをやっている人を横から見ていようなものだった。こっちも画面を見ていれば、シミュレーションの世界のハンドル操作の意味がわかるのだが、横からだ画面が見えないから、その意味がわからず、ゲームをやっている人の動きをただ見ていただけしかない。灰野敬二は、観客不在の暗闇シミュレーション。暗いだけで暗闇じゃないけど。同章の言う「こけおどしの狂気」にすぎない。ちっともおどかさなかつたけど。

2/2のテープをデビッドしてくれた武蔵久美子さん、どうもありがとう。